

2013（平成 25）年度博士号学位取得論文

指導教授 コヴリーギン，エフゲニー・B.

「フルシチョフ期ソ連における「ヒューマニズム」イデオロギーの形成」
ーフルシチョフ期ソヴィエト人文・社会科学における新動向の知識社会学的分析ー

**‘The Formation of ‘Humanism’ Ideology in the Soviet Academic Community
in the Khrushchev Era’**

法学研究科法律学専攻

藤井 陽一

論文要旨

ソヴィエト連邦最後の書記長、及び、初代大統領ミハイル・ゴルバチョフは在任中に内政・外交に抜本の変革をもたらし、「ペレストロイカ」、「グラスノスチ」はその当時世界語となった。これらの諸改革に対し「説明原理」を与えようとした、彼と同世代の所謂「60年代人」(шестидесятники : *shestidesyatniki*)、あるいは、「第20回党大会の子供達」と呼称される人々は何故その様な「新思考」を身に付けることができたのか。また、その「新思考」はいつ、どの様に形成されたのであろうか。そのルーツを辿れば、スターリン死後の所謂「雪解け」期にあることが判明する。「60年代人」を覚醒させることとなった環境を作り出した1950年代半ばにソ連の新しい指導者となったニキータ・フルシチョフと彼の盟友アナスタス・ミコヤンは、1956年に開催された第20回党大会以降公式イデオロギーにおいて新しい方向性を打ち出し始め、最終的には1961年10月に開催された第22回党大会において、従来ブルジョアの観念とされてきた「ヒューマンイズム」を初めてソ連共産党の公式的なイデオロギーの一つとして組み込んだ。フルシチョフ政権下では「ヒューマンイズム」は「人間の尊厳への敬意、人々の福祉への配慮、彼等の全面的発達、人間にとって好条件の社会生活の環境整備を表す諸見解の総体」と定義されている。このフルシチョフ期の「ヒューマンイズム」イデオロギーは、一旦、ブレジネフ期(1965~1982)に党指導部によって形骸化されていたが、その間も一部の学識者達によって信奉され続け、その後「第20回党大会の子供」であるゴルバチョフが指導者になった際に、彼のイデオロギー担当補佐官イワン・フロロフによって「新しい(真の)ヒューマンイズム」という標語となって、内外諸政策の「説明原理」として実質的に復活することとなった。

当論文ではアプローチとして、科学史家のイムレ・ラカトシュが提唱した「科学的研究プログラムの方法論」(The methodology of scientific research programmes: MSRP)の、同じく科学史家、高橋憲一による修正版、並びに、社会学者カール・マンハイムの世代論をソヴィエト人文・社会科学史に援用する。パラダイム論は旧パラダイムから新パラダイムへの移行の説明に適するのに対し、MSRPは変則性に対する耐久性、並びに、同一パラダイムを守る為に科学者達がいかに試行錯誤するかの説明、及び、併存する複数のパラダイム間の競争という外在的観点という点において優れているからである。MSRPの要点は次の4つである。

1) 分析の対象は、単一の理論ではなく、構成単位が通常著しい連続性によって結び付いている理論系列(a series of theories)であり、このまとまりを研究プログラムと呼ぶ。2) この理論系列は「理論系列の中で一貫して守られる部分」と「理論系列の中で修正される部分」とに区分される。前者を「堅い核(Hard Core)」、後者を「防御帯(Protective Belt)」と呼ぶ。3) 中心に「堅い核」があり、その周囲に「補助仮説(auxiliary hypotheses)」によって形成されている「防御帯」が張り巡らされ、部分的に修正・廃棄・拡張されながら、段々と厚みを増していく。4) 自然科学以外の分野への応用を批判されているパラダイムとは異なって、MSRPは発案者であるラカトシュ自身によってマルクス主義やフロイト主義といった自然科学以外への適用も想定されている。但し、高橋は理論系列の中で一貫して守られてきた部分は事後的にしか規定しようがない為に、ラカトシュの議論は歴史的に逆立ちしていると指摘し、後続理論との関係で核の一部が入れ替わり得るばかりでなく、同一理論

の内部でも「防御帯」との関係で「核」は可変的であると想定すべきであり、「堅い核」に代えて「柔らかい核」を想定することを提案し、「柔らかい核」が「堅くなっていく」過程に理論展開のダイナミクスがあると述べる。

当論文では、同時に、或る新しい世代動向の最も本質的な萌芽が旧世代に属し、その旧世代内で孤立している先駆者によって最初展開され、実践されるという事は頻発している事態であり、また、新旧世代間の接触は「中間的世代」によって介在されるというカール・マンハイムによる、世代間の知識の継承・発展の観点を導入する。加えて、彼が注目した、同一世代間に統一性を齎すところの経験の層化現象が、「60年代人」ではどの様に生じたのかを検証する。

当論文が検証の対象とする時期は、ヨシフ・スターリン死去の一年後、哲学者アレクサンドロフが文化相に就任した1954年3月から、フルシチョフが失脚した1964年10月までである。また、対象とするのは、「60年代人」、及び、「ヒューマニズム」イデオロギーの構成要素の一部であった倫理学、意識論、並びに、人格論である。当論文の意義は、ソ連崩壊後、日本では殆ど顧みられることも研究されることもなかった後期ソヴィエト人文・社会科学史を、20世紀末以降ロシア哲学界で出版され始めた20世紀後半のソヴィエト哲学史研究文献や彼ら自身の回顧録を手掛かりに、再構築することにある。また、同時に、彼ら「60年代人」の研究にしても、従来は「反体制派」の動向に重点を置くものが多く、ゴルバチョフ期のイデオロギー「新しい（真の）ヒューマニズム」形成に携わった「体制内異端派」は、海外の若干の著作を除き、注目されてこなかった。当論文はこの「60年代人」内の「体制内異端派」形成過程に着目した特異な研究である。

党指導部によるスターリン批判に触発されたソヴィエト哲学者達は、「ヒューマニズム」という、スターリン時代にはスターリンの文言と結びつけなければ「ブルジョア的」と看做されていたイデオロギーを、脱スターリン化したうえで自陣営の公式イデオロギーの一部とすべく努めた。その新規のイデオロギーの構成単位の一部が倫理学、意識論、及び、人格論であった。来るべき「ヒューマニズム的」共産主義社会を建設する「新しい人間」を育成するには、共産主義的道徳、高度な意識・自覚、及び、各個人の個性の開花が必要である、という考えが共有されていたからである。1950年代半ば以降これらが次々と勃興していき、進歩的旧世代から新世代へと知の継承が成されていった。この様な流れの中で、防護される核自体の構成要素の内、「ヒューマニズム」が新しく採択される党綱領の中で謳われることとなった。かくして、1950年代後半以降、謂わば、「フルシチョフ＝ミコヤン体制」による支持と後援を得て、創意工夫を重ねて、防御帯との関係で可変的な核の周囲をめぐる「ヒューマニズム」の防御帯を形成すべく、補助仮説を練り上げたり創造したりさえする、という新しい学術的方向性が「第20回党大会の子供達」の上の世代、すなわち、10月革命以前の社会で中等教育以上を受け、1920年代から30年代にかけて研究に従事し始めた少数の老年層の旧世代、及び、1900年代末～20年代初頭出生で、30年代から40年代にかけて研究活動に従事し始めた、マンハイムの用語で言うところの、「中間的世代」によって実際に形作られていったのである。

「60年代人」を育成したのは先ずその環境であった。所謂「雪解け」によってソ連社会が外部世界へ解放され、外国人を招待したり、あるいは、外国で開催された学術会議に参加したりすることが比較的容易になった。例えば、1957年夏には第6回世界青年学生祭が

モスクワで開催された。数多く開催された催し物の一つとしてモスクワ大学で哲学ゼミナールが開催され、ソヴィエト哲学者の若手が数人参加し、社会の発展の客観的法則と科学的予見の可能性について、外国の若手哲学者達と討議した。また、後に所謂「プラハ派」として主に1970年代から1980年代にかけて、来るべきゴルバチョフ期の内政、及び、外交政策の理論的基礎を築いていくこととなる人々は、「体制内異端派」を育成した開明的な旧世代のアレクセイ・ルミャンツェフ（1905 - 1993）が編集長を務める、『平和と社会主義の諸問題』誌の本部があるプラハで、その後ユーロコムニズムの指導者となる人々と日々接触して討議する可能性を持った。こうした人的ネットワークと外部世界へのソ連の開放がソヴィエト学界全体に知的刷新を与えた。所謂「プラハ派」以外にもソ連の学者は西側の思想に接する機会に大いに恵まれ、ソヴィエト研究機関は、外国の類似の研究機関と書籍や雑誌を交換し、西側の文献を購入する適度の資金を持っていた。また西側諸国との文化交流を通じて若干の社会学者は長期間西側の研究機関で過ごし、西側の学者と共に仕事をし、資料を購入し、図書館を利用していた。

学術界の新世代である「60年代人」(*shestidesyatniki*)を定義すれば、彼等は、1920年代前半から1930年代後半の間に出生した人々の中でも、1950年代半ばから1960年代の間にかけて反スターリン主義的な見解を形成し、(社会主義的)民主主義を信念として共有するインテリゲンツィヤである。また、度々この「60年代人」がテーマになる際に語られる用語«шестидесятичество» (*shestidesyanichestvo*)を、当論文では、この用語を巡る様々な諸見解を総括して、「60年代人」によって醸成され、共有された集合意識、つまり、彼等の共同体を統合する力として作用した「ヒューマニズム」等といった信念や道徳的態度であると同時に、その意識が1950年代後半以降もたらした知的運動」と定義し、「60年代人の集合意識・知的運動」と訳すことを提起する。

モスクワのソヴィエト哲学界では、まだ公式プロパガンダに反することを表だって口にすることができなかった1950年代前半から半ばにかけて、中間的世代と新世代とが「モスクワ論理学サークル」(後に「モスクワ方法論サークル」と改名する)といった内輪だけの勉強会を創設し、そこでの議論を通じて、また、進歩的旧世代に勇気づけられつつ、従来の教条主義的見解とは異なる、自分達独自の世界観を形成していった。

ソヴィエト倫理学に関して言えば、レーニンは、道徳は不要であるという風潮が強かった1920年に、従来の道徳・倫理とは異なる共産主義道徳なるものが存在することを強調し、また、文筆家で初代教育大臣アナトリー・ルナチャルスキー(1875 - 1933)はその頃既にカント等の古典に拠る道徳論の見直しを提言していた。教育者アントン・マカレンコ(1888 - 1939)は、1930年代に「人間に対する最大の要求と人間に対する最大の尊敬」という己の教育学的信念に基づいて、集団主義的倫理の必要性を主張した。その後、1950年にスターリンが論文『マルクス主義と言語学の諸問題』で、国家だけに止まらず道徳を含む上部構造一般が土台にもたらず能動的な機能についての見解を出したのが、ソヴィエト倫理学形成の契機となった。マルクス主義倫理学に関する著作でその後のソ連倫理学界に何らかの寄与をした著作が世に出たのは、スターリン死後の1954年のことで、教育学者兼倫理学者であったアレクサンドル・シシュキン(1902 - 1977)によるソ連初の道徳教科書が出版されたのは、更にその翌年のことであった。1950年代末にはソ連国内では党の指導の下でソヴィエト倫理学が大きく進展する為の下地が着々と作られていき、1961年に開催された第22回党大会

では新しい党綱領と共に 12 項目の道德規範が採択された。

1950 年代から 60 年代にかけてのソ連倫理学界においてシシュキン等の革命世代とヤコブ・ミルネル＝イリーニン（1911 - 1989）等の「中間的世代」が、次世代である、所謂 20 世紀の「60 年代人」（例えば、アブドゥスラム・グセイノフやオレグ・ドゥロブニツキー）、にとって研究の基礎となる土台を形作った。彼等は先ず主に倫理学のカテゴリーについて議論を闘わせ始めた。この革命世代や中間的世代はカントやスピノザ等といった、全人類的で形而上学的な古典への回帰、あるいは同時代の新思潮を参照するという方向付けを与えたのである。次世代の「60 年代人」の多くは先達の路線を踏襲し、旧世代と共にマルクス主義の空隙を、カントを含む欧米の多種多様な道德法則で補填することによってソヴィエト倫理学に多様性と重厚性を与えようと試みたが、彼らの間でどの思想潮流と調和させるかで見解が一致することはなかった。

意識論においては、1950 年代半ばに「レーニンへの回帰」ムードが高まる中で、哲学界では彼の『唯物論と経験批判論』及び『哲学ノート』への関心が高まった。レーニンは前者の中で、アレクサンドル・ボグダーノフによるマルクスの『経済学批判』序文の理解に対して批判した文脈の中で、社会的存在と社会的意識とを同一視すべきでない述べ、社会的意識は社会的存在の反映であり、社会的存在は社会的意識から独立していると主張した。加えて彼は、「史的唯物論は、社会的存在を人類の社会的意識から独立したものと認める。意識は、どんな場合でも、存在の反映、せいぜい近似的に正しい（適切な、理想的に正確な）その反映に過ぎない」と、意識と存在との関係を史的唯物論の観点から定式化した。レーニンはその後『哲学ノート』の中のヘーゲルの『論理学』の摘要に「人間の意識は客観的世界を反映するだけでなく、それを創造しもある」と書き込み、以前の自身の反映論を修正し、存在に対する意識の能動的な機能を認めた。スターリンは、前述した論文の中で、道德等の社会的意識を含む上部構造一般が土台にもたらす能動的な機能についての見解を出した。その後、「社会的存在に対して社会的意識が反作用をもたらす」という新しいテーゼが公式見解としてソヴィエト哲学界に提示された。このテーゼは 1956 年のスターリン個人崇拜批判後も哲学界で公式見解として継承され続け、それを理論的根拠として意識の主体性の重要性がフルシチョフ期に議論されることとなった。

1950 年代後半にはソヴィエト人文・社会科学学会では社会的意識に関する研究の不在と緊要性についての認識が共有されつつあり、また、既に着手されつつあったが、同時に思考の幅に限界があった。こうした哲学界での意識論の基礎付け・方向付け作業が第 20 回党大会直後から為され、先ずそのカテゴリーの整理が旧世代のヴァシリー・トゥガリノフ（1898 - 1978）によって為され、また、倫理学者のシシュキンは良心と意識とを関係付け、倫理学と意識論をリンクさせた。しかし、1950 年代半ばまでの意識論は一般的に社会的意識の分析に偏り過ぎるきらいがあった。この理論の発展にとって大きな役割を果たしたのは心理学者で旧世代に属するセルゲイ・ルビンシュテインであった。彼は晩年に著した『存在と意識』（1957）で、意識発生の必要条件としての言語の分析に基づいて意識化を定義するとともに、人間の自由な意識的行動と道德的責任との関係性や自由と客観的必然性との関係について提言した。心理学を専門とし、哲学の素養もあるルビンシュテインによって心理学的現象と哲学的問題とが初めて本格的に融合されたことはその後のソヴィエト意識論の発展にとって重要な一歩であった。

「中間的世代」に属するアレクサンドル・スピルキン（1919 - 2004）は意識の、知識の様な客観的な側面よりも、感性の様な主観的側面を重要視し、且つ、意識の機能における受動性よりも、寧ろ、主体性や能動性に重きを置き、『唯物論と経験批判論』でのレーニンの見解よりも『哲学ノート』でのそれに正当性があることを主張した。またレーニンは、意識を「人間の脳髄と呼ばれる、特に複雑な物質の塊の機能」と看做したのに対し、スピルキンは「頭脳は意識の源泉ではなく、意識の器官である」と考え、意識化は人間と世界との相互作用の道程で生じるものであるから、意識を頭脳の中で行われている生理的過程と同一視すべきでないと主張した。この彼の見解はマルクスとエンゲルスの共著である『ドイツ・イデオロギー』における意識の端初規定、即ち、「自分を取り囲んでいるものに対する自分の関係が自分自身に対して関係として現存するという在り方」に近似している。更に、マルクス＝レーニン主義の古典における意識論を修正・補足しようとするスピルキンの試みは、『ドイツ・イデオロギー』での「群棲意識」と「部族意識」の規定や、意識と言語との関係についての見解にも及んだ。こうして彼は、一方でルビンシュテインの道徳的意識論を引き継ぐとともに、マルクス＝レーニン主義の古典によって定式化された諸見解の幾つかに反論し、あるいは、それらを修正・補足することによって、来るべき 1960 年代の意識論の、謂わば、準備段階を構成した。

また、第 21 回党大会でフルシチョフが、ソヴィエト社会における世論の力の重要性を指摘したことを受けて、世論に関する研究が「中間的世代」に属するアレクサンドル・ウレドフ（1920 - 1999）によって、外国の社会学を参考にしつつ、始められた。また、1960 年には「60 年代人」の社会学者兼ジャーナリストであり、後に所謂「プラハ派」の一人となるボリス・グルシンによってソ連初の世論研究所が日刊紙の附属機関として米国の世論調査機関を模して設立された。

第 22 回党大会で採択された新しい党綱領では共産主義を「自由な自覚ある勤労者」によって構成される社会と定義づけており、その目的を達成する為に、社会的存在自体の真の民主化によって、「ヒューマニズム」精神に基づく国民の社会的意識と道徳的責任感の育成、勤労意欲や主体性の増進を図ることが謳われ、またそれと同じ目的で、世論の重要性にも着目された。

「60 年代人」のリュドミーラ・ブーエヴァ（1926 - ）は、ミクロの視点から、ソヴィエト国民一人一人の実生活に即した生活・労働環境の改善・充実や、共産党員自身、特に幹部の意識の変革、各人の個人的体験の特殊性に即した個人的意識の形成の研究の重要性を訴えた。これまで殆んど扱われてこなかった個人的意識と個人を取り巻く環境の相互作用という研究は先駆的業績と言ってよいものである。

こうして、第 22 回党大会後の 60 年代前半におけるソヴィエト意識論には、新世代である「60 年代人」の参与によって、個人の意識という新しい視角が導入されるとともに、現実を無視したイデオロギー強化路線に対する批判的見解が社会学的実証という新形式によって示された。また、中間的世代はこれまでの自己の見解を発展させて、社会的意識の形態に着目してこれを分析したり、所謂「哲学の根本問題」を弁証法的唯物論に基づいて解決するという形式を取って自分の脱マルクス＝レーニン主義的見解を総括したりしたのである。この二つの世代の共通点として、多少なりとも個人の意識を取り上げる、上部構造の諸要素間の相互作用を分析する、存在を意識が逆に規定するというテーゼの発展、という新しい方

向性が挙げられる。

第 22 回党大会がソヴィエト思想史にとって画期的な点は「新しい人間の形成」の為に 12 項目にわたる道徳的規範が採択されたことと共に、最重要課題の一つとして、「全てを人間の為に、人間の幸福の為に」という党のスローガンのもと、人間の個性の開花が謳われ、社会主義から共産主義への段階的移行に際して人間を全面的に発展させることが目指されたことである。

こうした個人の人格 (*личность: lichnost'*) に関する議論は、漸く 1950 年代末から人間、及び、個性の問題が徐々に着実に注目される様になったことで始まった。1950 年代半ばまでの一つのかかなり普及しつつあった傾向は、階級闘争、革命、プロレタリアート独裁がいまだマルクス主義の中で重視されていた時期に特徴的な、伝統的なアプローチの中に人間に関するテーマを書き加えるというものであった。それまでは歴史における人民大衆と個人（傑出した人物）の役割のどちらかを強調する議論に終始していた。第 20 回党大会後、「人民」概念の内容が「60 年代人」のアナトリー・ブテンコ (1923 -) によって整理され、「所与の国家、所与の段階における進歩的、革命的発展の課題の解決に自己の客観的法規に従って共同で参加できる住民のあれこれの層や階級の一部を含む、人々の歴史的に移り変わり行く統一体」と定義されるという進展もあった。また哲学界では、共産主義社会建設の為に人民大衆の積極性を引き出すことが今後の課題として提起されるとともに、帝政ロシア末期における人民大衆の役割論の内、スターリン期には紹介されていなかった箇所が旧世代によって光が当てられる等の動きがあった。

1950 年代後半での心理学会での人格研究の成果が、前述した『存在と意識』によって、いまだ人格論が歴史上の人物論に留まっていたソヴィエト哲学界に議論の基礎として提供され、これによって、ソヴィエト哲学界での人格論は倫理学・意識論との抱き合わせで議論されていくこととなり、倫理学者が道徳教育が人格に及ぼす影響を重視する論文を発表した。フルシチョフが人格/個性 (*личность*) の全面的発達に言及した第 21 回党大会後に、歴史上の著名人ではない一般的な個人に着目した著作が現れ、これ以降ようやく人格の全面的発達というテーマで人民の一個人にも関心が向けられることとなり、新綱領では倫理学や意識論と並んで人格論が「ヒューマニズム」イデオロギーの一角を成した。こうして主に党指導部が主体的に人格論の形成に梃入れしていったのだが、こうした党指導部による国民の人格管理政策に対して、世代を問わず一部の哲学者達はこれを官僚主義的な「類型化(没個人化)」であるとして反発した。ソ連国外では、フッサールやグラムシ、ド・シャルダンといった面々によって、人格等、人間を中心的なテーマとした議論が全世界的な広がりを見せており、1963 年に開催された国際哲学会議でも「人間の問題」が議事日程の主要点であった。この会議がソヴィエト哲学界の人格論に刺激を与え、旧世代のトゥガリノフは著作で人格論の発展に必要な様々な用語の定義付けを試みる等、学術的な人格論の基礎付けをした。その後人格論は 1966 年にはシンポジウムが開催される程にまで発展していった。

こうして、フルシチョフ期にソヴィエト社会が国外へ開放された結果、非マルクス主義の知識へのアクセスが容易となり、マルクス＝レーニン主義の空隙を他の知識体系によって補填することが可能となった。各世代のリベラルなインテリゲンツィヤは、党の意向に沿って「ヒューマニズム」理論系列の構築作業に加わるも、寧ろ、主に西洋哲学の伝統に基づいた普遍主義的なヒューマニズムを追求するようになったのである。